

長野市鬼無里府成地区における里山の持続的利用を目指した森林の管理方法の検討と予測される採取可能バイオマス量の推定

○田中いずみ（信州大）・井田秀行（信州大・山岳総研／志賀自然教育研）

【研究の背景と目的】

里山の荒廃が問題とされている一方で、里山の利用を考える動きがある。また電力不足などが叫ばれているなかで再生可能エネルギーやバイオマスエネルギーを利用しようという意識も高まってきている。このような現状を踏まえ放棄された里山から薪を切り出し再び利用しようという動きもある。

計算ではどのくらいのバイオマスが採取可能かといった研究結果（例えば上石津町木質バイオマス導入基礎調査報告書，2008）はあるが、実際の山はパッチ状に樹種が入り混じっており、実践的な利用を考慮した研究結果はない。

そこで、本研究では持続的に里山を利用することを目的とした場合、樹種・周辺環境・伐採方法を考慮した際に得ることのできるバイオマス量を推定することにした。

【調査地】

長野市鬼無里府成地区において聞き込みによって共有区を特定し、植生調査を踏まえ、各樹種400 m²の範囲で毎木調査を行った。

【方法】

植生タイプごとに2カ所ずつ20m×20m(400 m²)の範囲で毎木調査を行う。対象樹種は高木樹種に絞りに、コナラ、ミズナラ、クリ、クルミ、スギ、カラマツとした。得られたデータを基に木質バイオマス利用ポテンシャル評価モデルを使用して各樹種からの利用可能バイオマス量を推定する。

【文献】

田端英雄ほか；上石津町木質バイオマス導入基礎調査報告書，上石津町，2003